



直売所をリアルタイムで見られるアプリ「見えベジ」にアクセス！

東京都内には、多摩地域や区部西部・東部を中心に 1,400 件以上の農産物直売所があります。その多くは、生産者の畑や自宅に隣接した「庭先直売所」であり、採れたての農産物を購入することができます。しかし、消費者は実際に行ってみないと何が販売されているかわからない、生産者は売れ行き状況がわからない、という課題がありました。そこで、農総研では、^{ベジ}Veggie株式会社、株式会社^{ラプラス}Laplus、東京大学と、庭先直売所の売り場をリアルタイムで見られるシステム「見えベジ」を共同開発しました。

「見えベジ」は、庭先直売所に設置したカメラで撮影した売り場映像を、クラウドに自動で送信して、スマートフォン等からウェブサイト上で見られるシステムです（図1～3）。消費者は店頭の販売商品・数量を確認してから買い物に行くことができます。昨年の試験運用で行ったアンケートでは、約9割の消費者から「買い物に役立つ」と評価されました。また、生産者からも品物の補充や作業の効率化、集客に活用できるとの評価を受けました。

このアプリは直売所情報アプリ「チョクバイ GO！」でご利用いただけます。都内 10 名の生産者が参画してスタートし、今後参加者を増やしていく予定です。本システムを使ってみたい生産者の皆様は、「チョクバイ GO！」からぜひお申し込みください。

（スマート農業推進室）



“チョクバイ GO！”は
ここからアクセス！



図1 見たい直売所を選びます



図2 どこからでもリアルタイムで見られます



図3 直売所に設置したカメラで撮影しています

エダマメの多様な出荷形態 ～^{さや}莢、^{たば}束、^き切り枝～

江戸時代の書物に「江戸は豆の枝を去ず売る故に枝豆という 京坂は枝を除き皮を去ず売る故にさやまめという」とあり、江戸の町では枝に莢が付いたまま、上方では枝から外した莢の状態で売っていたことが分かります。

近頃は、莢のみを袋詰めした「莢もぎ出荷」（図1）が主流ですが、直売所などでは鮮度を重視した「枝付き束出荷」（図2）や、枝を一部付けて袋詰めする「切り枝出荷」など、多彩な出荷形態を見ることができます。

このような出荷調整に掛かる労力を軽減するため、農総研では現在それ



図2 枝付き束出荷

ぞれの出荷形態に適した品種と栽培法を試験して

います。「莢もぎ出荷」には莢離れが良いことが重要です。また「枝付き束出荷」には莢が密着し、草丈がコンパクトで束ね易いもの、「切り枝出荷」には節間が詰まり、茎が細く切断労力が小さいものが適します。

直売所などでは、5月になると早くも都内産のハウスエダマメが並び始めます。一足早く夏の味覚を味わってみては如何でしょうか。

（江戸川分場）



図1 莢もぎ出荷

ヤシガラ培地栽培で発生しやすいトマトの栄養障害と対策

ヤシガラはヤシの実の殻の部分を粉砕したものです。安価で利用しやすいことから都内の養液栽培で広く普及していますが、管理を誤るといろいろな栄養障害が発生します。

ヤシに吸収されたカリウムが多く残っているヤシガラで植物を栽培すると、カリウムとカルシウムのバランスが崩れてカルシウムをうまく吸収できずに、カルシウム欠乏による尻腐れが発生することがあります(図1)。余分な成分が洗浄により除去（アク抜き）されていないヤシガラを購入された際には、使用前に洗浄することをお勧めします。

また、栽培中に培地の pH が高くなると、微量元素が吸収できずに上位葉が黄化することがあります(図2)。その際はリン酸等の pH 降下剤を使用し、pH を 7.0 以下に調節してください。

この2つの症状は、水不足でも発生します。給水を制限する高糖度栽培では注意が必要です。

（生産環境科 土壌肥料研究チーム）



図1 カルシウムの吸収抑制で起こる尻腐れ



図2 微量元素(マンガン)の吸収抑制による葉の黄化

ブルーベリーに発生したうどんこ病

ブルーベリーは比較的栽培しやすいことから、都内で広く栽培される果樹の一つです。ブルーベリーにはこれまで 13 種類の病害が報告されていますが、2019 年に長崎県で発生したうどんこ病が、2020 年に都内の栽培圃場でも確認されました（図 1）。症状は 5 月～9 月にかけて、葉に黄化や赤褐色斑点を生じ（図 2）、時に白色粉状の菌糸をうすく形成します（図 3）。しかしながら、連続した降雨や高温などの気象条件によって菌糸が見えにくくなり、他の障害と判別しづらくなります。現在、果実や枝での発生はなく、発生品種はラビットアイ系のみで、ハイブッシュ系では確認されていません。ブルーベリーには同病に使用できる農薬はないため、病気の蔓延を防ぐために、発生葉は取り除いて畑の外へ持ち出して埋めるといった防除対策が必要です。

（生産環境科 病害虫研究チーム）



図 1 うどんこ病菌の分生子柄（左）
発芽した分生子（右） Bar:10 μm

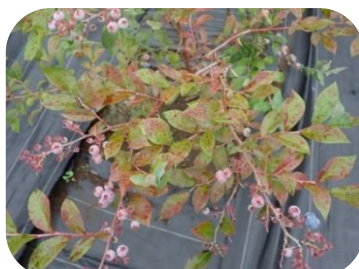


図 2 赤褐色斑点が生じた葉



図 3 葉表面の白色粉状の菌糸

除草剤に抵抗性を持った雑草「オヒシバ」が増えています

近年、日本の一部地域でグリホサートを主成分とした除草剤に抵抗性を持った雑草が確認されています。その一つがイネ科雑草の「オヒシバ」（図 1）で、このオヒシバは夏の生育が非常に旺盛で、放っておくと作物の生育を阻害します。グリホサートを主成分とする除草剤は多種多様な製品名で販売されていますが、容器に記載の「グリホサート○○○○塩」という成分名が目印です。もし、こうした除草剤を散布したのに枯れないオヒシバがある場合、グリホサートへの抵抗性を持った個体の可能性があります（図 2）。その際は、他の成分を含む除草剤（例えば成分名「グルホシネート」や「セトキシジム」など）を、容器のラベルに記載された希釈倍率・使用回数等を守り、適切に使用することで除草効果が得られると考えられます。

（緑化森林科 植木研究チーム）



図 1 オヒシバ



図 2 立川市内のツツジ圃場で確認された抵抗性を持つとみられるオヒシバ

東京のツキノワグマを DNA でみわける

ツキノワグマ（図1）は東京都の絶滅危惧種に指定されている一方で、スギやヒノキの皮剥ぎ等の林業被害をひき起こす害獣でもあります（図2）。近年、クマの生息数の把握や林業被害を引き起こすクマ個体の特定には、体毛を用いた DNA 解析が使用されるようになってきています。そこで、東京都多摩地域において、ハチミツを誘引剤としたトラップを用いて体毛を採取することにより、クマの DNA 解析を行って東京都に生息するクマ個体を識別しました。その結果、2018 年～2021 年までに約 80 頭の個体の識別に成功し、皮剥ぎ跡に残された体毛からも 5 個体を識別することができました。今後は、個体同士の血縁関係（親子等）についても解析し、皮剥ぎ等の行動が親子で引き継がれるのか検証する予定です。

（緑化森林科 森林研究チーム）



図1 奥多摩で確認されたクマ



図2 皮剥ぎ被害

農総研が所蔵する細密画から昔の研究を知る ～第4回～

品種改良に関する試験は、明治 37（1904）年にカボチャを対象に収量と品質の向上を目的として初めて行われましたが、本格的には大正 13（1924）年よりトマトやスイカ、イチゴなど 11 品目の野菜で行われ、多くの品種が生まれました。図1にご紹介する細密画は「東農二号（トウノウニゴウ）」です。昭和 9 年に「プリンスオブウエールス」に「ウインゾール」



図1 「東農二号（トウノウニゴウ）」

を交配して昭和 16 年に生まれた品種です。トマトは欧米から移入されたもので、酸味が強く日本人の口には馴染まなかったことから、野菜を多く食べる日本人向けに、甘味の強い品種として開発されました。

（研究企画室）



HP 版細密画の
紹介はこちら



育てます豊かな食とみどりの東京

公益財団法人 東京都農林水産振興財団 農林総合研究センター

〒190-0013 東京都立川市富士見町3-8-1

TEL: 042-528-5216

HP: <https://www.tokyo-aff.or.jp/site/center/>

Twitter: [@tokyo_tdfaff](https://twitter.com/tokyo_tdfaff)

こちらの QR コード
からご覧ください

